

アザレアの促成栽培試験

第1報 摘心時期とB-995処理について

八代 昇・鎌田 光邦*・安斎 正典

(福島県園芸試験場いわき支場・*現福島県園芸農産課)

Study on Forcing Culture of Azalea.

1. Effects of shoot pinching time and B-995 treatment

on shoot growth and flower bud formation of azalea

Noboru YASHIRO, Mitsukuni KAMATA* and Masanori ANZAI

(Iwaki Branch, Fukushima Horticultural Experiment Station,*Horticultural and Agricultural Section of Fukushima Prefectural Government Office)

1 ま え が き

アザレアの栽培は温室で促成開花させ、主に2~4月に出荷していたが、近年は11~12月にも需要量が多くなり、出荷期の前進栽培技術が必要となっている。また、生産農家も秋から春まで連続的に生産できると、栽培する施肥の利用度や生産鉢数の増加も容易となり専業経営にも結びつく。

そこで本報は早期に開花させるための最終摘心時期とB-995処理の方法について、花芽分化、発育等の面から検討した結果の概要である。

2 試 験 方 法

1. 最終摘心時期とB-995処理時期が花芽分化に及ぼす影響を知るために、王冠の2年生苗を用いて摘心時期とB-995処理の有無を比較した。B-995は0.25%液を用い、1鉢当り10CCを茎葉散布した。促成は夏の間、屋外で栽培しておいた鉢を10月23日にビニールハウスへ搬入し、11月27日より2週間間隔に3回に分けて処理をはじめ、最低夜温12℃に加温したガラス室で開花を促した。

2. 良品質の鉢花生産のためのB-995処理時期を知るために、最終摘心時期より、4, 6, 8週間経過した時

表1 摘心とB-995処理時期

試験Noと品 種	区	最終摘心時期 (月日)	B-995処理時期(月日)	
			第1回	第2回
I(1971年) 王 冠	1	5.12	5.12	6.24
	2	5.12	5.12	—
	3	7.12	7.12	—
II(1972年) 十二の一重 エ リ ー 大 八 州 ア ン ブ ロ	1	5.10	—	—
	2	5.10	6.7	6.14
	3	5.10	6.21	6.28
	4	5.10	6.5	7.13
	5	7.10	—	—
III(1977年) エ リ ー ア ン ブ ロ レオポルド	1	3.18	5.9	5.19
	2	4.19	6.4	6.16
	3	5.19	7.4	7.15
	4	6.20	8.4	8.16

表2 品種と原名

品 種	原 名
王 冠	Albert Elizabeth
大 八 州	Vewaneana alba
十二の一重	Frederik Sander
エ リ ー	Erie Schaeme
エ ン ブ ロ	Reinhold Ambrosius
エンディカ	エンディカ=ラインホルド
レオポルド	Leopold Astrid
マ ダ ム	マダム=ポーピン

点でB-995を2回散布して新梢伸長量や花蕾の着生状況を調査し開花傾向も検討した。

3. 最終摘心を3月18日より1ヵ月間隔に4回に分けて行い、45日経過した時に各区ともB-995を2回処理して、花芽分化時期と開花状況を3品種で調査した。

3 試 験 結 果

1. 最終摘心を5月12日に行うと、花芽分化開始時期が7月12日摘心区より45日程度早くなり、花芽の発育段階でも雄ずい形成期で約1ヵ月前進している。B-995を最終の摘心時期より1ヵ月後に2回処理すると、無処理区より10数日花芽の発育が前進していた。

花蕾が完成した時点での新梢伸長量は、5月と7月摘心区ともほぼ同程度であったが、B-995処理すると葉枚数

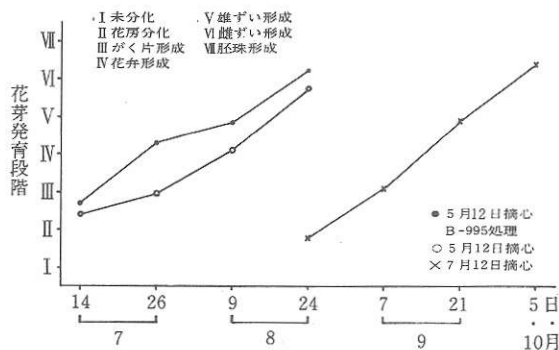


図1 花芽の発育状況(王冠)

では大差はないが、伸長量で 2 分の 1 程度に抑制された。

新梢の先端に着く花蕾数は、B-995 処理することにより増す傾向がみられ、鉢全体の花蕾数と新梢伸長量の差が草姿に変化をもたらした。

表 3 新梢調査

処 理 区	新 梢		新 梢 長 (cm)
	葉 数 (枚)	花 芽 数 (個)	
5 月 12 日 摘心 B-995 処理	6.6	3.1	1.7
5 月 12 日 摘心	5.6	2.2	3.9
7 月 12 日 摘心	7.2	1.6	4.0

花芽が完成した鉢を 11 月 27 日より 2 週間間隔に 3 回に分けて促成すると、花芽分化・発育が早かった B-995 処理区が 1 週間程度開花時期を早くした。

2. B-995 処理すると花芽分化が誘導され、そのために新梢伸長量も抑制する。したがって処理時期が早過ぎると新梢伸長量が短すぎて鉢全体のボリューム不足となり、商品性を低下させることもある。そこで B-995 処理までの長い区程新梢伸長量が大きくなった。また、新梢の先端に花芽を着けるが、摘心時期が早い場合や B-995 処理時期が早過ぎると、花蕾の側芽が二次的に伸びて小枝を作り、この先端に花芽を着ける現象がみられた。比較的この現象の多い品種は大八州、エリーで、十二の一重は少なかった。

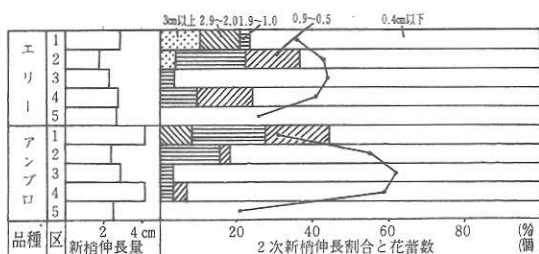


図 2 新梢伸長量と花蕾数

このことから、B-995 処理を行う適期は、最終摘心後 6～8 週間経過した時がよいと思われる。ただ、生育旺盛な品種は摘心後短期間で、また、緩慢な生育をする品種は新梢の伸長状況をみながら遅く処理すると、草姿のよい鉢花が得られるものと思われる。

これら処理した鉢を 10 月 2 日に温室へ搬入し、11 月 13 日より加温促成して開花の状況をみた。早咲きのエリーでは、摘心時期が早い程開花時期が前進した。また、B-995 処理すると、無処理区より開花が遅れる傾向がみられ、B-995 処理時期と開花との関係では、処理時期が早い程花芽

の発育が早くなる傾向も確認できた。晩咲の大八州では、最終摘心時期の早い処理区が開花時期を前進させ、B-995 処理による開花促進効果も顕著に現われ、処理時期が早い程開花時期を前進させた。このことから、B-995 は直接的な開花促進効果ではなく、花芽分化や発育を早くするものと思われる。そして、開花の時点で早咲きの品種の場合、B-995 処理区が無処理区より遅れていることは、抑制的にはたらいっていると思われる。一方、遅咲きの品種は開花時期を前進させているが、これは、花芽分化・発達時期を早咲きの品種より大きく前進させ、総体的に開花時期を前進させたものと考えられる。

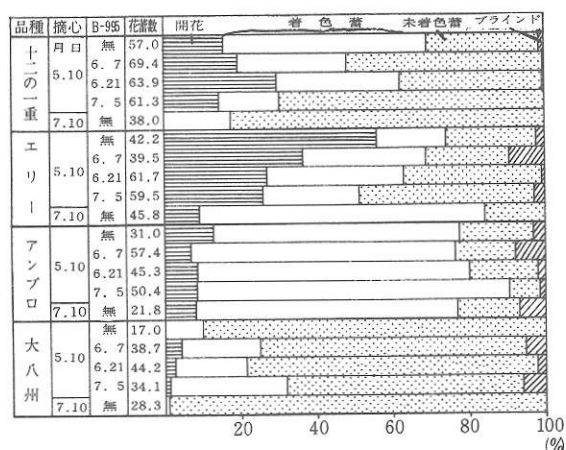


図 3 B-995 処理と開花傾向

3. 最終摘心時期と B-995 処理時期を組合せて、花芽の分化・発育状況と開花時期の促進程度を調査した。

花芽分化・発育は、各品種とも処理時期が早い程前進しており、摘心時期から雄ずい形成期までに要した日数は、遅く処理した方が短くなっている。花芽の分化・発育状況を品種別にみると、早咲きの品種（エリー）が早く、晩咲きの品種（レオボルド）は遅れている。

開花状況は、摘心と B-995 を早く処理した区は各品種とも開花時期が前進しているが、需要量の最も多い暮出し生産を目標とする摘心時期は、（開花率 10% に達した時点で算出する）エリーで 5 月中旬、アンプロとレオボルドで 3 月中旬までに最終摘心を行い、B-995 を処理する必要がある。

最終摘心を遅くした場合は、開花時期は遅れるが、開花揃いがよく、品質的には遅い摘心時期のものが優っている。

以上の結果から、最終摘心時期と B-995 処理を早くすることにより、花芽の分化・発育を早め、早咲きの品種を用いると早期出荷も容易となる。また、B-995 処理により、新梢の伸長を抑制し、花蕾数を増し、鉢花の品質をも向上させることもできる。